

令和4年度 普及啓発に関する取組み実施状況について

本市では、認知症の人が希望を持って自分らしく暮らし続けることができる取組みを推進している。取組みを推進するための一つとして、認知症の人の気持ちに寄り添うとともに、自分のこととして認知症を捉えることができるよう、正しい知識と理解の普及啓発に努めるとともに、相談窓口の周知及び充実・強化を図っている。

令和4年度は、地域での普及啓発に加え、より幅広い世代・対象に向けた認知症の正しい知識と理解の普及啓発を推進した。

(1)若い世代への普及啓発

①学生のアイデアを活用した、認知症の正しい知識の普及啓発の企画、実践【新規】

12月4日(日)に、東北福祉大学仙台駅東口キャンパスにおいて、東北福祉大学ゼミ生23名による市民向けの普及啓発イベントを実施。当日は、キャンパス前を通行中の約180名の市民の方に認知症に関するクイズ等に参加いただいた。大学生の取組みに対して、多くの中高校生や子ども連れの若い世代の方に興味を持ってもらうことができ、認知症について知ってもらう機会となった。



認知症へのメッセージで作るクリスマスツリー
「不安」「みんなで支え合おう！」等、さまざまな声が。



「人生ゲーム」を通じて認知症とともに楽しみながら暮らすことや社会資源等を知る



認知症に関する「○×クイズ」と「市で取り組んでほしい施策アンケート」アンケートでは、安心して暮らせる街への期待が寄せられた



掲示ポスター

②大学の授業等での「認知症ケアパス」の活用の促進

認知症サポーター養成講座を学生向けに定例開催している市内大学に対してケアパス活用を提案し、仙台市認知症ケアパス活用を拡充。

③大学、専門学校、小中高校生向け認知症サポーター養成講座の実施

令和4年12月末時点で大学5件 658人、専門学校3件 147人、中学校7件 818人、小学校11件 468人となっており、計 2091人を養成した。これは全体の約7割近くを占めており、若い世代への普及啓発を推進した。

(2)幅広い世代への普及啓発

①仙台市介護予防月間において認知症の理解と普及啓発に向けた市民講演会の実施 【新規】

11月6日(日)に、介護予防月間のオープニングイベントとして「元気力アップフェスティバル」を開催し、その中で市民向け講演会「認知症の人とともに希望を持って暮らし続けられる幸せな地域づくりをめざして」を実施した。東北工業大学 認知症の人と環境研究所 所長 谷本裕香子氏と、認知症の啓発を实践する「わいわいハッピー劇団」を招き、住まいや地域づくり等、認知症の人の暮らす環境に関して考える機会となった。聴講者は約90名で、60代以上の方の参加が多かった。



「わいわいハッピー劇団」の舞台発表

東北工業大学ライフデザイン学部
生活デザイン学科講師

谷本 裕香子

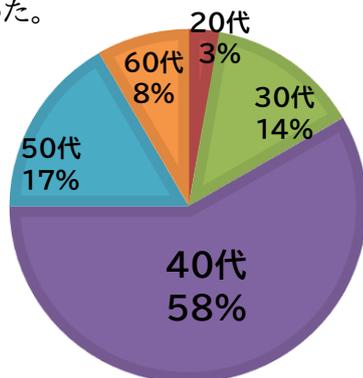
博士(人間科学), 一級建築士
認知症の人と環境研究所所長



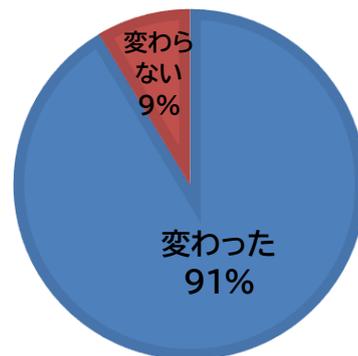
谷本裕香子氏による講演の様子

②企業と協働した社員向け「認知症パートナー講座」等の実施 【新規】

11月14日(月)に、本市と協定を締結している損害保険会社と共催で、認知症の当事者やその家族、地域で認知症の方の支援に携わる介護職員の方に登壇いただき、認知症に関する誤解や偏見を払拭するセミナーを実施した。当日は損害保険会社、そのグループ会社社員、保険代理店等、30代~50代を中心とした約100名が参加し、その多くが「認知症観が変わった」と好評であった。



年代別受講



セミナー前後で認知症観が変わったか

認知症に対する「知識」ではなく「まなざし」を中心に

・登壇： おれんじドア ～ご本人のためのもの忘れ総合相談窓口～
 実行委員会代表 丹野 智文 氏・鈴木 正勝 氏・加藤 勝宏 氏

「認知症の診断を受けて、これから先、心身の不安や仕方がなくなると、私を助けてくれる人がいない、私より先に認知症を患う。その不安を乗り越えて社会生活を送るための社会が必要です。」
 2015年より丹野氏が代表となり、認知症のご本人のためのもの忘れ総合相談窓口「おれんじドア」を開設。当事者実行委員とそれぞれ目的の異なる人を元気にし、認知症に対する社会的理解を高める活動をしている。




「支える」存在よりも「共にある」ことのできる存在へ



参加者へ発信したメッセージの一部



認知症の当事者の講演(現地会場)

アンケートで受講者から聞かれた言葉(一部抜粋)

- ・病名でなくその人本人をみる。
- ・前向きに過ごすことも出来る病気という認識が変わった(決して暗い事だけがすべてじゃない)。
- ・今まではなってしまっただけいけないというイメージだったが、そんな事はないことに気付かされた。
- ・登壇した当事者本人3人とも、明るく生活されているのが印象に残った。